

発表者 ~23年度町広島平和体験参加者~

| | |
|------------|-------------|
| 内田 晃平 (下中) | 小笠原 恭平 (社中) |
| 小口 純枝 (下中) | 河西 ほのか (社中) |
| 林 亮祐 (下中) | 後藤 力樹 (社中) |
| 松澤 美咲 (下中) | 山崎 あゆか (社中) |

~町戦没者追悼式での23年度「広島平和体験研修報告」中学生の発表より~

平和とは何か



今こそ、平和への祈りを

2011年3月11日、午後2時46分。東北地方を中心に起きた東日本大震災は私たちに衝撃を与えました。思いもよらない被害をもたらし、特に津波が全てをのみこんでいく光景は忘れることができません。そして、東京電力福島第一原子力発電所の事故が起き、平和に利用されると信じられていた原子力発電所について、改めて見直すべきだという動きが出てきました。このような時に、世界で唯一の被爆地広島への平和学習に参加の機会をいただきました。今、広島を学ぶ意味をかみしめています。

突如大きな閃光に包まれ、気づいたときにはもう広島は、なにもかもなくなり、多くの死者とけが人で町はあふれかえっていました。原子爆弾が落とされ、町は死の海と化していたのです。死者十四万人。原爆は生き残った人にも大きな傷跡を残しました。秒速440メートルで三千度の熱線は、多くの人を焼きました。音速が秒速約340メートルなので、それをはるかに超える速さです。つまり爆風のあとに音がやってきたというところです。



1945年8月6日午前8時15分

重い熱傷を負い皮膚が黒く焦げてしまったり、皮膚が剥がれて垂れ下がったりしていました。軽傷のやけどでも数ヶ月後には、ケロイドになる人もいました。放射能を浴びたことによる内部被爆でも多くの人が苦しみました。ケガもなく元気に過ごしていた人たちも、数年後に突然体調不良を起こし、検査してみると、白血病だと発覚しました。今現在でも多くの人が原爆の後遺症に苦しんでいます。



全身にやけどを負った男性

唐惨な被害の連鎖

「黒い雨が降ってきた時。熱い炎に囲まれ息苦しく喉が渴いたので、突然降ってきた黒い雨を飲むと口を大きく開いて天に向け、雨を飲んだ」とこの絵の作者は書いています。原爆が投下されて二十分から三十分後頃から、大雨が降りました。最初の一、二時間は、爆発のとき巻き上げられた泥やチリ、火事によるススなどを含んだ黒い大粒の雨でした。この黒い雨の中には、強い放射能が含まれていて、池や川の人々には、強い放射能が含まれていて、池や川の人々は水を求めていたため、放射能を含んだ雨とは知らず、口を開け降ってくる黒い雨を飲んだそうです。飲んだ人はその後三ヶ月にもわたり苦しんだり、数年後白血病を発病したりするなど、六十六年たった今でも、なお苦しみを続けています。



人影の石

爆心地から260メートルの地点にある銀行の石段に座っていた人の影が映っています。原爆の閃光を受け、逃げることができないまま死んでしまった人の影が黒く残っています。

被爆されたガイドさんの話

平和記念公園のガイド、今田よう子さんから聞きしたお話で心に残ったことがあります。

戦後から六十六年たった今も、原爆症で亡くなっていく人がいます。今田さんの友人と一緒にガイドをしていた人も、それまで元気にガイドをしていたのに、五年前白血病を発病し、亡くなってしまったそうです。今田さんもおついでで何が起るか分からない恐怖と戦っているそうです。原爆によって亡くなった約十四万人の人たちがいいたからこそ、今の平和な世の中があると聞かれました。

話を聞きながら、この亡くなった人々の分まで、しっかり平和を伝えながら一杯生きていかなければならないと思いました。「平和な世の中になってほしい」という願いを多くの人たちに伝えながら、生きていくことが、今一番大切なことだと思いました。

原爆死没者慰霊碑



安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから

と彫られています。この碑からは当時の人々の悲しみと怒りが伝わってきました。石碑の地下には被爆し亡くなった人を埋葬していません。

私は、その骨さえ残らなかつた人の影や、そのほかたくさんの人影を見て、「皆さんにこの悲劇を未来永劫伝えていかなければならない」と思いました。さらに、「この悲劇を人々の記憶から忘れられないようにしていかなければならない」と思いました。

学ぶことは伝えること

僕が広島平和体験学習を知ったのは、中学一年生の時。文化祭のステージ発表で先輩方の体験報告を聞いて、とても衝撃を受けました。被爆直後の広島の様子や原爆の投下された時間で止まった時計など、とても心が痛くなるような映像ばかりでした。報告の最後に、被爆者の方のお話がありました。その方は、原爆が投下されたという悲しい過去を語り継いでいくことで二度と繰り返さないでほしい、と強く語っていました。

僕は、自分なら何ができるのかと考えました。そして考え抜いて決めた答えは「学ぶこと」でした。

原爆が投下された一九四五年八月六日、たった一発の原爆によって、罪もない多くの命が失われたのです。そんなことがあってはならないと思います。戦争は何の利益も生みません。代わりに、多くの命と心が失われます。残るのは悲しみだけです。僕たち若い世代が、戦争について語り継いでいかなければなりません。僕は、学ぶことは伝えることと同じだと思えます。たくさん学ぶことを学び、たくさんの人に伝えていきたいです。それが自分ができることだと思っております。

(内田晃平)